



八百屋神

川崎ゆき

坂田は色々なものに手を出したため、仲間内から八百屋と言われている。八は八方と言うぐらい、数ではなく方角のことだろう。八方手を尽くして探したなどがそう。八百万となると、無限に近い数だ。八百なら、数えられるだろう。流石にそれだけの数に手を出したわけではないが、器用貧乏なのだ。器用だが貧乏なのか、器用の中身がぞんざいなだけか。器用にこなすが、出来はそれほどでもない。

何をしてもこなせるのだが、大した仕事にはならない。そのため、ますます別のこと、違うことに手を出す、それもすぐに先が見えてしまう。初級か中級レベルまでは行けるが上級は無理だ。

「的を絞ろうと思うのだけど、何を選べばいいのかが分からない」

「八百屋でいいんじゃない」

「やはり専門性が欲しい」

「色々やってきた中で、一番ましなのを選べば？」

「それが何か分からない」

「じゃ、評価だ」

「評価？」

「人に決めてもらうんだよ」

「人に」

「一番評価されたものが、君の本来の仕事だと思うけど」

「自分の好き嫌いじゃなく？」

「そうそう。仕事は世間のためにやっているんだ。世間がなくなれば、仕事もない。だから、世間が認めてくれているものを選べばいいんだ」

「世間って、誰だ」

「今まで関わった人だよ。数百人もいないだろ」

「絞ると十業種ぐらいだ」

「その中で一番評判が良かったのがあるだろ」

「ある」

「じゃ、それに絞るんだ」

「一番評判がよかったものはあるけど、もう飽きて、今じゃ好きじゃない。やる気もしない」

「しかし、それをやらせれば、他のものより上手かったんじゃない。ものになるとすれば、それしかない、僕は思うけど」

「うーん、考えるなあ。自分が本来やりたかったことかどうかが曖昧なんだ」

「評価されるものが自分の本来だよ」

「人が決めるの？」

「多数がね」

「うーむ」

「自分のことは自分が一番よく知っていると思っているでしょ」

「当然だよ」

「案外他人様の方が本質を見抜いていたりする」

「そうかなあ」

「一箇所で懸命に頑張ることだね」

「最近それに気付いたんだけど、その一箇所の、箇所で迷っているんだ」

「だから、人様に決めてもらうんだよ」

「じゃ、君が決めるの」

「僕も、君にとっては人様の人だから、人様には変わりはないけど、僕一人の評価では片寄るだろ」

「そうだ」

「だから、漠然とした人様、これを世間様と言ってもいい。これは何処にもいるようでいいけど、君が考えている世間様でいいんだよ」

「え、余計に分からない」

「だから、世間で一番受けがよかったものを選ぶんだ。それが何かは君なら分かるだろ」

「ああ、少しだけましなのがある。あれが一番受けたなあ」

「それを続ければいいんだよ」

「でも、飽きたし、先へ進むほど面倒臭くなるしで、中断しているんだ」

「それは君が決めることじゃないんだ」

「世間様が決めるのかい」

「そうそう」

「君本来のものは、実際には無数にあるんだ。その無数は奥の方で繋がっているから、一つのことと集約させるんだ」

「難しい話はいいから、要するに一番受けたのをやればいいんだろ」

「自己満足で終わるより、他人を満足させることの方が大事なんだ」

「他人を満足させたことが自己満足に繋がるってことかい」

「その場合、ずっと他人を満足させ続けないと、いけないよ。八百屋からの脱出にはどれかに決めないといけない」

「八百屋じゃなく一屋か」

「一箇所懸命だよ」

「一所懸命だろ」

「そうそう」

了